

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

神戸モスクの歴史と地域社会のつながり

神戸モスク理事 新井 アハサン氏

新井アハサンと申します。私はパキスタンで生まれ、日本に来て三四年たちます。まず、イスラームという宗教はどのようなものかということから始めて、またモスクというのとはどんな役割であるかということについてお話をいたします。

■イスラームの基礎

イスラームでは、一番大切にしているのは、まず神の存在です。神が唯一であるということです。神には相対者がいないこと、これを一番大切にしています。「アッラー」というのは神の名前で、アッラー以外には神はありません。そして、ムハンマドは最後の預言者であるということです。ムハンマドはアラビア語圏で生まれた方でしたので、聖典もアラビア語で与えられています。これはクルアーンという聖典です。原本は一四〇〇年前から今日まで手元にあります。それをもとにして、クルアーンを説明するために、詳しいことは説明が必要になります。それはハディースです。ハディースは、預言者の

口から言葉で説明されれば、神の教えであるということ。それをベースにしてわれわれは宗教をまとめて、わたしたちの生活に組み入れます。

二番目は一日五回のお祈りが義務となっています。朝太陽が出る前に一回目。太陽が真ん中になって、沈み始めたら二回目。その時間と太陽が沈む真ん中の三時ぐらいに三回目。そして、太陽が沈んでから四回目、それから一時間半ぐらい後に最後の五回目のお祈りです。三番目は断食があります。断食というのは、イスラームのカレンダーの九月に当るラマダーンという月におこないます。一年に一ヶ月間の断食です。それは一ヶ月間ずっと断食するのではなく、朝太陽が出る一時間前、一番目のお祈りをする時間の手前で食べるのをやめます。そこからスタートして、太陽が沈む四番目のお祈りまで断食します。ですから大体半日ですね。一二時間から一四時間の断食です。これは本当に素晴らしい経験なのです。

四番目は、喜捨、アラビア語で

ザカートといいます。寄付です。私たちが働いて貯金したお金、一年間寝かしたお金は、一年たったら、その四〇分の一、二・五パーセントを引いて別にしておいて、それを困った人たちに寄付します。イスラームではいろいろな意味で社会を守るために、皆が生活できるように考えたのです。今寄付すれば、必ず来世にはもらえる約束されていますので、これは投資なのです。

最後はハッジという巡礼です。その巡礼は身体が丈夫な人で、お金の余裕があれば、必ず一回行くことが義務になっています。どこに行くかという点、現在サウジアラビアという国、その中でマッカという町の周りの決まった場所にお参りします。「メッカ」という人もいますが、「マッカ」が正しい発音です。そこに一年に一回だけ決まった期間に、二、三〇〇万人がはいります。マッカという町に一つの建物があって、カーバといいますが、それは神様の家という名前です。その場所はアブラハムによって建てられた建物に由来します。その場所だけが巡礼の中心になり、現在イスラーム教はそこを基にして、一日五回のお祈りのときに、そちらの方向を向いてお祈りをします。世界中の人がマッカの方に向かって祈ります。以上のことが

イスラームの基礎ですね。

■神戸モスクの歴史

今日のテーマは神戸モスクです。一日五回のお祈りの集団礼拝のために、必ず場所が必要になります。それを私たちはアラビア語でマスジドといいます。これは英語でモスクとして書いてあり、それをそのままカタカナにして使っています。正しい名前はマスジドです。マスジドというのは頭を地面に下げる場所でもあります。サジダというのは神に頭を下げるときに、地面につける時の状態をいいます。その場所を設けるためには一つの条件があります。モスクを建てるに、必ずそのモスクは、場所としては人のものにはもうならないということです。

神戸のモスクは一九三五年に建てられましたが、それより一〇年ぐらい前からいろいろな活動が始まりました。神戸にはインド地域から来たイスラーム教の商人、貿易関係の人たちが多く住んでいました。また、中央アジアからタタール民族、その人たちは社会主義というロシアの関係でなかなか宗教を守れなくて自由ではないから、アメリカや日本などに移動して、日本では難民として認められ、第一次世界大戦の後に日本に入ってきました。その人たちも大勢神戸

にいましたので、皆が努力して、まず土地を設け、その上に建物を建てました。モスクの図面ですが、神戸モスクのデザインを考えた人はインドから持ってきたと聞いていました。ところが、つい二週間ほど前にチェコの大使館から電話があり、このモスクの図面はチェコの人が作ったというのです。私たちが聞いたところの情報は、インドからの図面で竹中工務店が神戸でこのモスクを建ててくれたということですが、竹中工務店に図面はありますかと聞いたら、焼けてしまっていないかどうかと。今週の土曜日にチェコの大使館が取材でモスクに来て、撮影したいということで、日本で初めてのモスクのデザインは、チェコのデザイナーが行ったということになっていきます。一九三五年に、なんとかモスクのオープニングができて、お金の支払いも一人の方が半分ぐらい払いました。

モスクを建てて、その運営のために理事会を作りました。当時モスクの人たちは、市役所について、法務省のことを調べ、宗教法人として登録したいと思いました。モスクがはじめて日本に誕生しましたので、法務省にいったら、イスラームという宗教は日本ではまだ紹介されていないので法人にはできないといわれました。それでがっ



神戸モスクの正面入口

かりしましたが、モスクの中でお祈りをするのは全然法律違反ではないので、お祈りをして、社会を守りながらそのモスクを運営するのであれば、そのまま活動してくださいということまでは書いてあります。時間がたてば、どうしてもやはりイスラームを日本に紹介したいということで、社団法人として最初登録し、それから諸活動を明確にしながら、後に宗教法人になりました。一九七五年に宗教法人として認められ、神戸ムスリムモスクという名前で登録されました。

それがモスクのスタートでした。あいにく第二次世界大戦の空襲でモスクの周りが焼野原になって、モスクの建物だけが残っていたという歴史があります。日本の軍隊

が二年ほどこのモスクを使用していた期間がありました。二年後にまたもとに戻り、またモスクとしての活動が始まりました。その当時は、中心は大体インド人とトルコ人でした。私が神戸モスクに入ったのは一九八〇年です。その当時モスクの信者というのは本当に少なく、モスクの修理はある程度できていましたが、来る人が少なかったのです。私たちは一週間に一度、金曜日の礼拝を集団礼拝として守っています。金曜日の二番目の祈りにあたる時間、二時半からのお祈りの時は厳しく義務とされています。仕事場から必ず離れてモスクに行ってお祈りしなさいと。普段は自分の家でも、仕事場でもできませんが、金曜日の二番目のお祈りにあたるジュマのお祈りは、必ずモスクで行います。何をするかというと、その日だけのお祈りとスピーチがセットメニューになって、大体三〇分から五〇分ぐらいの時間がなければいけません。そのために、モスクに出入りできる人たちの人数は、一〇人ぐらいしかいません。毎週一〇人から一五人ぐらいです。現在までは、だいたい二〇〇人から三〇〇人です。もし休みにあたれば、四〇〇人、五〇〇人の時もあります。またラマダーン明けの日になりますと、大体一〇〇〇人ぐ

■神戸モスクでの活動

次にモスクで私たちはどんなことをしているかということをお話しします。イスラーム教では、一日五回のお祈りが義務です。そのためにイマームという人がいます。これはリーダーと同じ意味で、お祈りの代表の方ですが、他の宗教と違って、例えばその人がいなければお祈りが始まらないということとは一切ありません。イマームというのは、よく勉強ができた人で、大学を出ていて、ちゃんとイスラームの説明とイスラームの法学がわかること、その方を私たちは一人雇っています。以前先生をやっていた方は、エジプトの方で長い間お世話になりました。今はシステムを少し変えまして、インドから来ています。そして交代でまた違う国から入ります。その人は何をやるかというと、一日五回のお祈りの代表と金曜日のお祈りの代表としてつとめます。一日五回はみんなのためですので、必ず祈らなければなりませんね。

それ以外に、例えば結婚式もモスクでやります。イスラーム教では非常にシンプルな結婚式です。二人できて、二人の証人の前で認めれば、それでOKです。場所はモスクでなければいけないということはありませんが、皆雰囲気としてモスクに入りたいので、できるだけモスクに少し人が集まって、友達や両親や、イスラームでない方たちも入ってきます。ほとんど結婚式のケースは、男性が外国人で女性が日本人、これが九〇パーセントです。その時には、まずは短いスピーチですね。結婚はどんなものであるか、どんなふう

いうことは、気を付けなさいという意味です。そのチャンスは三回しかありません。三回女性に離婚ですといえ、後はその人とは関係がなくなりませう。

もうひとつは、モスクでの葬式です。イスラーム教では、誰かが社会の中で亡くなった場合は、必ず周りの人たちが、その人を土葬、埋葬するまで努力しなければなりません。これは義務的なものです。みんなが一緒になって、亡くなった人が私の親せきであるかないかは関係なく、その方の身体を洗わなければなりません。亡くなった方の身体を私たちは自分の手で洗います。それはすごい体験です。それは業者には任せません。モスクに洗う場所があり、亡くなった方が女性なら女性が洗い、男性なら男性が洗います。それはもちろんプライベートなパートは全部隠したうえで、水で洗います。水は全部通します。そのあとで、白い布、まったく使っていない一般的な布を三枚用意し、上半身と下半身一枚ずつ、もう一枚は身体全部を外からまきます。そうした後で、箱にいれてもかまいません。箱に入れるのは運ぶためです。それを墓まで持っていきます。その時は業者を使います。専門の車を使います。その人の体を大事に墓場まで持っていくことも祈りと同じな

のです。身体を洗うことと、お祈りをする事です。身体を洗ったら、私たちの前に遺体をおいて、後ろにみなで列をつくって、決まった形でお祈りをします。終わった後、お墓に持って行って埋葬します。そのあとは自分の家からでも、またお墓にお参りしてもかまいません。それはお祈りの意味で、また自分にレッスンになります。自分もいつかそうなるから、できるだけ自分の手でそれをやったほうが経験になります。

■モスクに集う人々の仕事と国籍

日本に住んでいるほとんど外国人の方、イスラーム教は九〇パーセント以上の方が外国人なのです。その中でたぶん八〇パーセントぐらいが自営業で、自分の商売、貿易関係をやっている人がほとんどなのです。自分の時間を自由につくれますので、金曜日このようなお祈りの時間でもなんとかしてこられます。一割ぐらいの人がたぶん留学生や仕事をやっている人たちです。その人たちが自分の先生と話をし、たとえば一二時から一時半ぐらいで終わるお祈りです。あとは、二時には必ず会社に帰れるぐらいの時間をとっています。一時間程もあれば、神戸の人であれば参加できるのではないかと思います。金曜

日の礼拝は男性の方は厳しく命令されていますが、女性は子どもを育てたりなどいろいろな役割がありますので、金曜日に必ずモスクに来なさいということはないです。これがない人は、自分の家でいつもの一日の二番目のお祈りをすべいいと思います。仕事をしている人も、時間が合わない都合が悪いときは、自分の仕事場でお祈りをすればいいです。

次に国籍ですが、だいたいは東南アジアが近いですから、インドネシア人が多いですね。ただしモスクに毎日出入りする人ではないです。モスクから離れたところに住んでいて、金曜日やほかの日に入ってくる人たちは、パキスタン人も結構多いです。多いのはパキスタン人とインドネシア人。最近ではアラビア地域のアフリカ人も結構増えています。ヨーロッパ、オーストラリア、アメリカからの人は本当に少ないです。英語の先生とか、そのぐらいの人数しか住んでいませんね。自営業としてはやはりアジア人とアフリカ人が中心で、その中でイスラーム教の人たちです。お祈りは皆一緒にしますけれど、お祈りが終わったら、やはり自分の国の人たちと話をするために集まったり、母国の食事を食べる事が出来るレストランに

また日本人のムスリムの方は、土曜日や日曜日に勉強会がありますので、その時は来ます。男性の方は本当に少ないです。最近はずっと増えていますが、そのきっかけも大体、東南アジアのイスラームの国にいたときにイスラームに興味を持ちはじめ、入ってきます。そのような人は本当に少ないです。またイスラームの外国人と日本人が結婚して、生まれてくる子どもはみな日本人なので、その数が増えていきますね。ただし、今のところはモスクにくる子どもの数はそれほど多くありません。

■子どもの問題

日本人と外国人が結婚して、または外国人同士でも日本に住んでいる人たちの子どもが、昔に比べ

たら結構増えていますね。その人たちは、四歳から五歳の時に、親にモスクに行つてまずクルアーンの読み方を勉強してきなさいと言われます。私は生まれたのはパキスタンでウルドゥー語という言葉です。まだ小学校に上がる一年ぐらい前から、親がモスクに行つて三〇分でも一時間でも先生と一緒に座つて、それを習つてきなさいと躰けられました。そのことを、今私たちは神戸モスクでもやっていきます。大体四歳ぐらいから一二歳までの子どもが来ています。毎週日曜日は普通の学校は休みですので、モスク学校として二時間勉強会をしています。その時にこの四歳から一二、三歳までの子どもが二五人ぐらい今来ています。その子どもたちに、私たち五、六人の先



日本最古の神戸モスク



神戸モスクの礼拝堂

生が集まり、年齢を分けて、教えています。今何人かはアラビア語でクルアーンが読めるようになっていきます。

あとは、私の子どももそうですが、例えば六歳になれば小学校にいけますので、そのとき、イスラーム教の場合難しいのは給食なのです。今から二五年ぐらい前、私の一番上の子どもが小学校入学のとき、地域の小学校にいき校長先生と話をしました。この地域に住んでいますので、学校に入りたいのですが、食事の問題があるので協力をいただけませんかという相談をしました。非常に先生が理解をしてくれ、メニューを見せてもらい、それをチェックしたところ、九〇パーセント以上は食べられないものでした。(笑)では、何を食べたらいいかといった

ら、今度は先生のほうが逆に心配になってしまいました。残ったのは食パンとミルクとちよつとしたデザートだけでしたから。どうしてかというところ、イスラーム教では動物に関しては、と殺の仕方が決まっています。それにきちんと合っていないければ、ハラールにならないのです。ハラールというのは「やっつていいこと」という意味です。やっつてはいけないことは、似ていますが、ハラームと違います。陸の動物に関しては、豚はもちろん一〇〇パーセントだめですが、それ以外の牛、羊、鳥などは食べても大丈夫です。しかし、と殺の仕方が正しくなければだめです。海の動物に関しては、そのまま大丈夫です。魚は全部大丈夫です。ですが、学校ではそんなに毎日魚を食べるわけはありません。先生が困ってしまいました。

んと小中学校、高校、大学、大学院、博士まで塾なしで全部クリアできています。それはやればできるのです。子どもの食べ物に関しては、やはり先生が心配してくれて、お弁当を持たせましょうかという考え方をしました。この子は幼稚園も行っていないし、小学校一年生として入ってきたときにもし弁当をもってきたら、周りの子どもからいじめられるかもしれない。では六か月だけそのままにしておきましょう。子どもが学校からうちに帰ってから、おかあさんががんばって食事を作ってあげたらそれでいい。近いですが、二時ぐらいに学校が終わりますので、それで六か月たつても子どもも文句をいわないし、大丈夫です。ねといいました。ただし毎年先生が変わりますので、二番目の子どもが行くようになって、さらに三人目の子どもの時には、「残酷な親だ。なぜそんなに子どもをいじめているのか。可哀そうだ。栄養失調になりますよ。」と先生が言うのです。先生、そうではないですよ。この子には家でお母さんがそのメニュー通りに作っています。ハンバーガーだったらハンバーガーが置いてあるし、肉を炒めたものであれば、それがあるし、カレーだったらカレーを作っていますよ。家に肉がないことはないですよ。

日本人の家で肉といえば三〇〇グラムとか五〇〇グラムを買ってくると思いますが、うちではいつも二〇〜三〇キロ肉を置いてあるんです。冷凍室にいっぱい肉はありますよ。栄養失調にはなりませんよといっています。それで安心して、先生は納得してくれました。

■食物の問題

ハラールというのは「食べていいもの」、または「やっつていいこと」です。その中で、だいたい肉食の問題がでてきます。あと油とスープの問題です。どんなものからとったスープであるか、またゼラチンとか豚からとっているものは一〇〇パーセントだめですね。そのようなもの問題がありますので、それをベースにして、例えば山崎パンなどに聞くとやはり何か入っているというのです。全部だめになってしまうのです。それをベースにして、東京に人数が多いので、ある人はある工場に食パンだけを作ってくれないかということ、ビールという名前の食パンだけ、聞いたことがあります。

べればありますが、ハラールのマークを付けた日本のブランドは今まで聞いたことはないです。逆にマレーシアやインドネシアなどイスラームの国から輸入されたもので、今ハラールの店の中にはおいてあります。それにはマークがついていきますので、安心して食べられますよということ。

私はずっと三〇年間と殺場へ行つて、自分の手で牛をと殺して、後はもちろん最初の段階で、生きている動物を死なせる際、ある段階の一部をイスラームの方または神の聖典をもらっているユダヤ教とキリスト教、その宗教から選んだ人が行えば問題ありません。そのやり方は決まっています、無宗教の人がやっつてはだめなのです。簡単に説明しますと、条件が三つあるのです。一つはと殺する時に、この前から切らなければいけないです。胴体を、必ず一気に切らないといけません。そうすれば中の血は一気に外にでてきます。牛を切ってしまったら、これは脳に切っています。脳に切ると切った時点で、この血は身体の中に残ってしまいます。中に血がどんどん止まってしまうので、その血がいけないのです。できるだけ自然の血は胴を通って外に出さなければいけません。それは基本です。一つはこれで、こちらから切りま

うちの子どもは幼稚園に行っていないのです。それは私の大条件で、うちの家内と話をしたときに、子どもは学校に勉強に行くのだから、その年齢になったら学校に入れます。塾は行かせません。塾に行くのと二つの学校に行っていることになつてしまうのでだめです。家であなただけが教えない。私はバックアップをしますが漢字ができないので、教えられません。うちの子どもは四人います。全員が、ちゃ

この子には家でお母さんがそのメニュー通りに作っています。ハンバーガーだったらハンバーガーが置いてあるし、肉を炒めたものであれば、それがあるし、カレーだったらカレーを作っていますよ。家に肉がないことはないですよ。

日本人の家で肉といえば三〇〇グラムとか五〇〇グラムを買ってくると思いますが、うちではいつも二〇〜三〇キロ肉を置いてあるんです。冷凍室にいっぱい肉はありますよ。栄養失調にはなりませんよといっています。それで安心して、先生は納得してくれました。

べればありますが、ハラールのマークを付けた日本のブランドは今まで聞いたことはないです。逆にマレーシアやインドネシアなどイスラームの国から輸入されたもので、今ハラールの店の中にはおいてあります。それにはマークがついていきますので、安心して食べられますよということ。

す。もう一つは、神の名前で行わなければならない。これは条件の大条件です。神の名前を誰が唱えるかという、信者ですね。信者でなければいけないのです。信者はイスラーム教、ユダヤ教、キリスト教の信者であって、その神を信じていることによって、と殺を神の名前でやるといふことです。

■コミュニティとの関係

次はコミュニティとの関係ですね。周りの地域とどんなふうによつていけるかという関係で、一番私が考えているのは、イスラーム教でお祈りする前に呼びかけをすることです。アザンです。それはアラビア語でスピーカーでします。もともとはミナレットという塔がありますが、その塔の一番上のところにあがって、マッカの方向に向かってアザンしていたのです。マイクのない時代。そのためミナレットなのです。今は上にスピーカがついていますので、モスクの中からアザンします。ただし私たちは、朝早いのです。周りにイスラーム教の方があまりいないので、朝だけはスピーカは使わないようにしています。それ以外の四回はスピーカを使っていますが、今まで一回も苦情はありません。

あとは、例えば、阪神大震災の

ときにモスクの周囲の方々と非常に良い関係ができました。私の一つの経験談ですが、地域の長老のような、ゴミ回収などの面倒をみる人がいまして、その人と私が一度喧嘩したことがあります。私が出したゴミを、彼が気に入らないから、これは今の時間ではなくて、あと一時間後にしなさいとか、口論し具合が悪かったのです。ちょうど地震のときに、隣に短期大学があつて、そこも避難所になっておりましたが、モスクはイスラーム教の方が何人が集まりましたので、それはムスリムのために避難所にしましょうと、自主的に皆が集まりました。食べ物も東京から取り寄せたり、イスラーム教で食べられないものが多いから、食べられるものだけをトラックで運んでもらったりしました。その時に、その人が短期大学のほうに食事してもらいに入ろうとしたところ、自分の家があるのになぜこちらにくると、断られていました。彼は泣きそうな顔をしていたときに、私は、ここに食べ物がありますよ、毎日取りにきて問題ないですよ、と彼に言いました。彼は、お礼を言つて、その日から私は彼とすごく仲良くなりました。

またある時、私は事務所からお祈りにいく途中、私の前で二人のおばさんが、これはイスラーム教

の教会です、よくお祈りをしますね、よく喧嘩も戦争もしますね、と言いながら歩いていましたよ。このおばさんを呼び止めて、説明をさせましたが、イスラーム教は政治家の問題で、世界中が今困っているだけで、イスラーム教ではありません。イスラーム教は、名前から言えば、平和という意味ですから、守れば平和になるということ。守らなければ平和にならないということです。守るための宗教ですので、われわれはいつも自分に言っています。守れば平和になります。自分が平和になれば必ず人にも平和を与えることができます。

■墓地の問題

最後に、墓地の問題ですね。神戸モスクは、外国人墓地を利用しています。神戸の外国人墓地はユダヤ教、イスラーム教、キリスト教に与えられた場所、そこに土葬、埋葬はできませんが、埋葬できる土地がだんだん狭くなってきました。五・六年前から、仲間を通してりあえず自分で買わなければいけないということになってしまいました。神戸市は土葬の許可をしないといっていますので、私たちはどこかで場所を探さなければいけないのです。それは非常に難

しいことで、日本では土葬を許可している場所がまず少ないです。それに地域の問題もありますし、隣の土地の同意書を取らなければいけないとかという問題もあります。五年間で岡山やいろいろなところへ二〇力以上探しに出かけました。あきらめないで今も探している最中です。私の考え方は、もしできたときに、その地域の方々の宗教も含めて無料でやりましようという考えです。今は墓地が非常に高く売られています。私たち

が調べた結果では、坪五〇〇円ぐらいの場所なのに、墓地にすれば五〇万円とれるとか、問題ですよ。死んだ人からお金を取るうとしたら、可哀そうですね。だから私たちが考えたのは、地域の人たちを集めて、ここに土葬はするけれど、そのかわりその地域の人たちのための場所をさしあげますという考え方で、今動いているところです。周りの地域と仲良くしながらやっていくしかないですね。

文化／社会抵抗における 原動力としての聖書受容の諸相

キリスト教と文化研究センター 主任研究員 浅野 淳博

本研究プロジェクトは二〇一〇年度の単年プロジェクトである。その目的は聖書が秘める文化／社会抵抗の力が歴史的にいかに発揮されてきたかを探るものである。初代教会は周縁者としての視点をその文書に綴りつつ、外社会に対して共同体アイデンティティを維持しようとした。しかしその思想は教会が体制に取りこまれるにいたって、排除されるのではなくむしろ馴致される道を辿った。そのような状況にあっても聖書は

反体制的エネルギーを内に秘め続け、しばしば時代・地域ごとに社会／文化抵抗の原動力となってきた。その好例としては一六世紀の宗教改革が挙げられ、また今日においては解放の神学が注目を集めている。本研究においては、アジアにおいて—今回は研究者の専門分野によって日本と朝鮮半島に限定される—、聖書受容がいかに社会／文化抵抗の原動力となってきたかを様々な教会テキストをとって検証する。「社会／文化抵抗に

おける原動力としての聖書受容の諸相」という主題は、テキスト選択の範囲を定め、解釈の方向性を明確化するものである。キリスト教宣教を抵抗運動として捉える一般的な歴史検証はこれまででもなされてきたが、本研究は具体的に聖書がいかにその運動を方向づけ、またその運動を促進する道具として用いられたかという問題に焦点を置いていく。このように具体的な問題意識を持った研究の成果は、今日における聖書受容に対して新たな視点と新鮮な解釈の鍵を提供することになる。

二〇一〇年一月に第一回研究会が開催された。そこでは狭間芳樹（京都大学文学研究科研修員）により、「キリシタンの殉教と文化抵抗—聖書受容と『脱文化主義』」と題して、「神が人となった」とい

キリスト教と文化研究センターは、昨年度で一二周年を迎えました。これに合わせて、今日までの研究を総括する意味で『キリスト教平和学事典』を刊行したことはニュースレターでも繰り返しお知

うキリスト教の啓示と来世観の活性化がいかに当時の現世的な「文化主義」に抵抗したかを考察した。また浅野淳博（関西学院大学神学部准教授）により、「内村と聖書—ガラテヤ書研究を中心に」と題して、今日の日本の教会がイエスの

焼き印（周縁者としての体験）と深く刺さった棘（アジア諸国侵略者の一部であるという体験）を身に負っているという現実が価値ある聖書解釈の可能性につながる点を指摘した。二〇一一年三月に予定されている第二回研究会においては、岩野祐介（関西学院大学神学部助教）によって内村鑑三と明治期の教会に関する研究、また方俊植（京都大学博士課程後期）によって民衆神学に関する研究の発表が行われる予定となっている。

「キリスト教主義教育」研究プロジェクトについて

キリスト教と文化研究センター副長 平林 孝裕

キリスト教と文化研究センター

らせしたところで。RCCは、その設立の目的に「キリスト教と人間・世界・文化・自然の諸問題に関する総合的な調査・研究」を行うことと謳われています。『平和学事典』はこの趣旨にのっ

とって企画されたものでした。これまででは、本学がキリスト教主義大学として社会・世界にいかに関与できるか、キリスト教の視点からその諸問題にいかに対応するかが、時代に要請された新しい課題であるとの認識から、キリスト教に軸足を置いた学際的研究に重点的に取り組むことで、センターの基礎を固めようと努力してきました。

同時に、「本学のキリスト教主義教育の内実化を図る」ことがセンター設立の目的として明示されてきました。キリスト教主義教育が、とりわけ本学のそれがいかにあるべきか、については、すでに意義深い研究が積み重ねられています。関西学院でも、青山学院との共同で『キリスト教教育の理想と現実』（一九六八年）などが上梓されています。また『キリスト教主義教育研究室紀要』等にも重要な論考が掲載されています。RCCでも、一二年をへて、いわばセンターの次のフェーズにはいったことを機に、本学での豊かな伝統をふまえながら、二一世紀の大学としての新しい課題に回答するために、キリスト教主義教育の問題に本格的に取り組むべきであると判断するに至りました。この目的のために、二〇一〇年度に、あらたに研究プロジェクトをたちあげ、センター

副長をコンビーナ（本年度は平林）として長期的展望の下で継続的に取り組んでいくこととしました。具体的なテーマとして、「（一）キリスト教主義学校のもつ「ミッシヨン」（使命）をいかに明確にし、またそれを学内で展開するか、さらにそのようなミッションを共有する機会として、（二）いわゆるキリスト教概論講義、本学では「キリスト教教育科目」のデザイン、また今日広く求められるFD・効果測定、（三）正課科目と両輪となつて実施されるチャペル活動を、それぞれどのように展開すべきかを

編集後記



検討することが挙げられます。しかしながら、原理的な問題として、（四）「キリスト教主義（教育）」とは何か」との問いが、つねに反芻されなければならないことは言うまでもありません。初年度二〇一〇度は十分な活動ができませんでしたが、来年度より山本俊正副長を新たなコンビーナにむかえて、打樋啓史主任研究員・舟木讓主任研究員、またたくしをメンバーに研究課題に取り組む準備を進めています。今後の活動にぜひご期待ください。

神戸モスク理事の新井アハサン氏による講演内容をメインとして、ここにニューズレター第一八号をお届けいたします。これは、本研究センターの共同研究プロジェクトのひとつ、「ミナト神戸に宗教多元主義を探る」の活動の一環として、昨年一〇月二一日に開催されたミニ・フォーラムでの講演内容を再録したものです。

アハサン氏のお話から、地元神戸におけるイスラームの方々の信仰と生活が、生きいきとした形で伝わってきます。特に、神戸モスク

クのコミュニティがこれまで地域社会との関係において体験してこられた様々なことへの言及からは、多くを学ばせられると同時に、異なる背景をもつ人々が平和共存していく上でのリアルな課題について考えさせられます。興味深くまた示唆に富む、貴重な講演をしてくださったアハサン氏に改めて感謝を申し上げます。

東北地方太平洋沖地震発生から六日目を迎えました。被災地で苦しみ、悲しみ、不安の中で過ごされる数多くの方々のことを覚えます。この現実をしつかりと心に留めながら、新年度の本研究センターの活動を展開していきたいと思えます。

（主任研究員・打樋啓史）